

脳卒中は、医学的には脳血管障害と呼ばれます。脳の血管が切れる場合（出血性）と脳の血管が詰まってそこから先が虚血する場合（梗塞性）の二つのタイプがあります。どちらも、血管が栄養していた脳の部位や損傷の程度により、一命を取り留めても様々な後遺症が残る事があります。



後遺症の例

片麻痺（右半身、または左半身の手足、顔などの麻痺）

運動障害： 手指の細かい動作ができない・歩行障害・失調症・構語障害 など

感覚障害： 触覚・痛覚・温度覚などの鈍麻・感覚麻痺・痺れ・視覚障害・嚥下障害・排尿障害・高次脳障害・記憶障害・注意障害・行為障害・言語障害（失語症）・認知障害・感情（気分）障害・その他

脳卒中後遺症に対する一般的な治療

薬物療法（脳循環代謝改善薬など）

リハビリテーション（理学療法・作業療法・言語聴覚療法など）

脳卒中後遺症に対する遠絡療法

急性期（発症後3カ月以内）

大脳の出血（梗塞）部位のライフフローを改善することで、ダメージを受けた脳の働きを活性化します。特に浮腫などによる微細な脳細胞の圧迫の改善に効果があり、麻痺などの身体症状の早期回復を促し、後遺症を最小限にとどめる効果が期待できます。

慢性期（発症後4カ月以降）

頸部、胸部、腰部の中樞、および麻痺側の手足のライフフローを改善することで、重み感やつっぱり感を軽減します。間脳～脳幹部が活性化され、12脳神経の働きや自律神経が整い集中力や注意力も改善します。リハビリなどのトレーニング効果を発揮する為の土台を整えます。また、痛みや痺れなどの改善が期待できます。

遠絡統合医学では、神経機能の障害を神経細胞と神経線維に分けて分析しています。

痛み症状は神経線維の障害になります。神経線維の障害が修復されるためには、血液やリンパ液、電解質が十分に循環する必要があります。遠絡統合医学では、神経系の伝達も含め、血液やリンパ液、電解質などの流れを総称してライフフローと呼んでいます。スムーズなライフフローが十分に確保されている事は自己の修復力、治癒力に直結します。遠絡統合療法の目的はライフフローを調整する事にあります。つまり、身体の自己治癒力を再建させる事になります。「長く患っている」「症状が変化しない」という状態の根本に対してのアプローチができます。

症例 1

70代 男性

脳出血後の左片麻痺があり、他の症状として左側の視野に対する違和感と耳の閉塞感・詰り感を訴えていました。また、杖を使用して一人で屋外を歩き回れる方でしたが、左肩～腕～手にかけての重みと腰痛も訴えられていました。

初回治療直後、左肩～腕～手にあった痛みと腰痛が改善しました。また、左側の視野の見やすさと、耳の閉塞感・詰り感にも改善が確認できました。

症例 2

50代 男性

脳幹出血後、右側体幹と上下肢の失調症及び右半身の痺れ訴えておられました。痺れは、ビリビリと静電気が起きているような感じで、特に右肩・手掌・わき腹・下腿・足裏に強く感じていました。また、右肩を水平に横に伸ばす(水平外転)と痛みが出ていました。

初回実施直後、患者さんから

「痺れが和らぎ、右手指が動かしやすくなった」

「右足趾の先の痺れが少し良くなった」

「肩の痛みが無くなり、楽になった」等 改善の報告受けました。

週3回の頻度で3週間実施したところ、肩の痛みは無くなりました。

また、肩・腕・足の痺れの軽減も実感されていました。

毎回治療後は、手指の動かしやすさや、歩きやすさを実感されました。

治療後すぐに痺れの軽減を実感できるとおっしゃっていました。

解 説

ダメージを受けた脳細胞を再生する事は出来ないため、麻痺を完全に無くすことは不可能ですが、残存する神経の関係を整える効果や、反応をスムーズにする効果が出る事を症状の変化から推察することが出来ます。実施後の動作のスムーズさや継続による持久力の向上なども確認されています。